

川崎哲也*: 福島県に産するサクラの一新雑種について

Tetsuya KAWASAKI*: On a new hybrid cherry from
Fukushima Prefecture

ソメイヨシノは、それ自身が雑種であることがはっきりしたのは最近のことであるが、他種との間によく雑種をつくることは、古くからわかっている。人為的に作出されたものとしては、センダイヨシノ *Prunus*×*Sakabai* Makino (ヤエベニシダレ×ソメイヨシノ)、*Prunus*×*Juddi* E. Anders. (オオヤマザクラ×ソメイヨシノ) がある。そのほかにも、自生、栽培を問わず、他種とソメイヨシノとの雑種と考えられているものは多い。ソメイヨシノは、特殊な個体を除き、結実のごくわずかしのみられないのが普通である。このことは、以前からソメイヨシノが雑種ではないかと考えられて来た根拠のひとつでもあった。しかし、花粉の外形は大部分が正常であり、また、人工培養基上では、そうとうよく発芽する。従って、ソメイヨシノの不稔の原因は、雌ずい側にあるのではないかとと思われる。このことから、ソメイヨシノの花粉によって他種が受粉した時、結実して雑種のできる可能性が大きいものとする。

ここに報告するサクラは、カスミザクラとソメイヨシノの雑種と考定されるものであって、1963 年、福島県福島市飯坂町の今野礼三氏が、飯坂小学校滝野分校校庭わきの山林中で発見され、その後現在まで同氏と協同して観察を続けて来たものである。同分校校庭には、ソメイヨシノの老樹が数本見事に花を咲かせており、また周囲の山林中にはカスミザクラが多い。これら 2 種のサクラは、それぞれ花期を異にし、ソメイヨシノの方が早く咲く。しかし、カスミザクラの方は個体により咲く時期に差があるため、比較的早く咲くものもあり、一方、ソメイヨシノも、気候の関係でそうとう遅くまで花が咲き残っていることは珍しくないから、4 月中旬以降において、両種が自然交配する機会はいくらでもある。このサクラを原産地の地名に因んで、タキノザクラと名付けたい。このサクラは、現在までのところでは、他にはみられないが、ソメイヨシノの栽植されている地方で、カスミザクラの多いところでは、同様のものが発見される可能性が大きいと考えられる。

このサクラは、成葉がソメイヨシノに非常に近い形態をそなえており、一見判別に苦しむほどである。まず、葉の質はカスミザクラのようにうすくなく、ソメイヨシノとほぼ同等の厚みを持つ。また、鋸歯の状態も一見してソメイヨシノと見分けられな

* 埼玉県浦和市立大谷崎中学校。Ohyaba Lower Secondary School, Urawa, Saitama Pref. Japan.

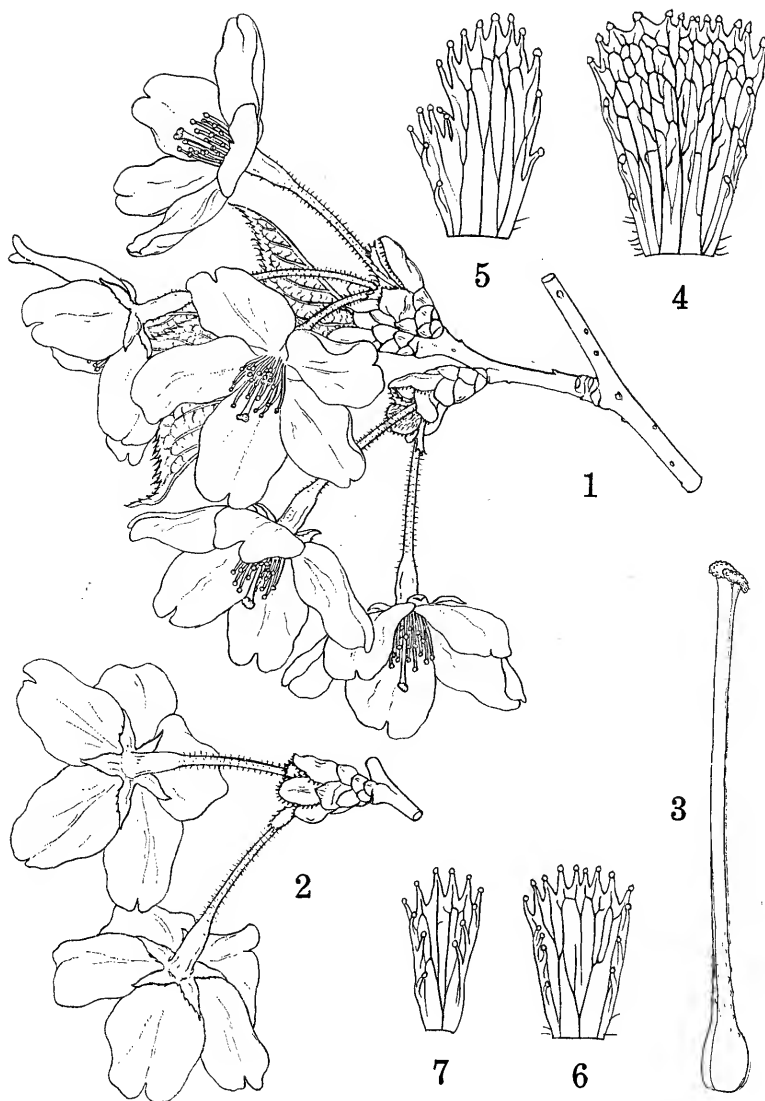


Fig. 1. *Prunus takinoensis* T. Kawasaki 1-2. Ramuli floriferi $\times 1$.
3. Pistillum $\times 5$. 4-7. Bracteae $\times 5$.

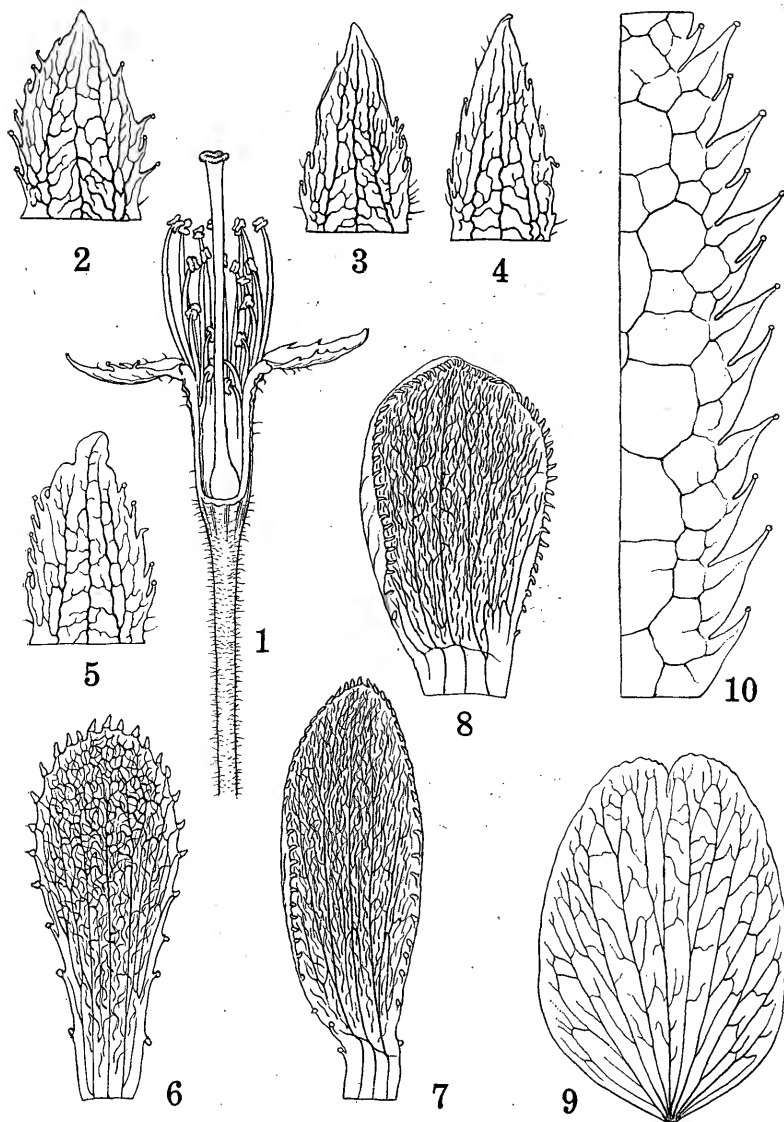


Fig. 2. *Prunus takinoensis* T. Kawasaki 1. Sectio floris sine petalis $\times 3$. 2-5. Calycis lobi $\times 5$. 6-8. Squamae gemmarum floriferarum $\times 5$. 9. Petalum $\times 3$. 10. Pars marginis folii adulti ca. $\times 5$.

いほどよく似ている。しかし、ソメイヨシノにくらべて、葉柄の毛が多く、しかもあとまで残り、毛の性質はカシミザクラに近く、白色で開出する。また、芽の色は茶色を帯びておりソメイヨシノの緑色と異なる。また開花時にすでに芽がそうとう程度伸び出ている点もソメイヨシノの芽がほとんど伸び出ないのと異なる。一方、最も重要な形質であるがく筒に関しては、ソメイヨシノより小さく、カシミザクラよりは大きく、またソメイヨシノのように基部がふくらまないが、カシミザクラよりは全体にややふとい。がく片は、ソメイヨシノのがく筒と共に有毛であるのに対し、ほとんど無毛である点は、この付近に多くみられる型のカシミザクラに近い。花柄や小花柄には開出する白色の毛を密生し、毛の性質はカシミザクラにひとしい。花弁は純白色で、やや大型である点を除けば、カシミザクラに近い。花柱が無毛であるのもカシミザクラに似る。

Prunus (Sargentiella) **× takinoensis** T. Kawasaki hybr. nov. (*P. × yedoensis* **×** *P. verecunda*)

Arborea. Folia juvenilia flavescenti-viridia saepissime ex apice atrofuscescentia margine saepe viridia. Squamae gemmarum floriferarum; exteriores ca. 6 durusae triangulato-semicirculares ovoides vel circulares 2-5 mm longae 3-6 mm latae, castaneae lucidae margine pallidae; interiores ca. 6 molles obovatae spathulato-obovatae vel spathulato-oblancheolatae apice rotundatae, 6-12 mm longae 5-8 mm latae margine minutissime glanduloso-serrulatae, flavescenti-virides vulgo ad apicem rubro-fuscescentes vel rubro-castaneae, extus glabrae lucidae raro prope basin sparsim pilosae intus praeter basin pilosae. Flores subpraecosi 2-4 vulgo 3 corymbosi. Pedunculi ca. 9-14 mm longi viridescens patentes pilosi. Pedicelli ca. 15-20 mm longi viridescens vulgo ad apicem rubro-fuscescentes patentes pilosi. Bracteae anguste obtriangulatae vel oblongo-oblancheolatae saepe inaequales ca. 5-7 mm longae 2-5 mm latae, virides interdum rubro-fuscescentes, intus raro sparsim pilosae margine anguste triangulato-serrulatae, serrulis apice glandulosis. Calycis tubus cylindrato-campanulatus 6-7 mm longus, glaber vel basi et apice sparsim patentes pilosus, vulgo ex apice rubro-fuscescens basi atrovirens. Calycis lobi 5 oblongo-lanceolati vel ovati ca. 5 mm longi 3-3.5 mm lati apice acuti interdum paullo acuminati, utrinque glabri non nisi prope basin rarer pilosi, margine minutim glanduloso-serrulati et pauca ciliati. Petala 5 ovata vel ovato-elliptica apice emarginata ca. 15 mm longa 10-11 mm lata candida. Stamina ca. 35, filamentis ca. 6 mm longis candidis. Pistillum ca. 14 mm longum, stylo pallide flavo-virenti glabro, ovario ovato ca. 2 mm longo viridi

glabro. Lamina folii adulti obovata interdum oblongo-obovata ca. 4-11 cm longa 3-6 cm lata, apice acuminata raro cuspidato-acuminata basi rotundata interdum truncata vel acuta utrinque 8-10 venosa, supra atro-viridis luciduscula glabra infra pallide viridis sine luce. Petioli ca. 16-20 mm longi patente pilosi, atropurpureo-rubescences rarissime apice petioli vel basi laminae 1- vel 2-glandulis instructi. Drupa pauca.

Nom. Jap. Takino-zakura nom. nov.

Hab. in Takino, Fukushima Pref. (T. Kawasaki, Apr. 26, 1968-typus in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo.)

〇エイシュウカヅラの語源 (津山 尙) Takasi TUYAMA: Explanation of Japanese plant name 'Eishūkazura'.

Gardneria nutans Sieb. et Zucc. ホウライカヅラにならない中井猛之進先生は同属の *G. insularis* Nakai に対して エイシュウカヅラの名を与えられた。この植物は済州島の植物をもとにして発表されたものであるが、和名は「瀛洲カヅラ」とあるが、特に説明はない。辞書によると、「瀛洲は海中にあって、仙人の住むという三神山の一」ということである。三神山は即ち、蓬萊、方丈、瀛洲の三島である。即ち蓬萊カヅラと同属であるので組にしてこの名を与えられたものと考えられる。西欧にもこのような組の思想があると思われるが、上述のように中国では特に組あるいは対の思想が強く、これが日本にも強く影響していると思われる。Walker 氏の質問として、どうしてアオガネシダというのか、と聞かれた。確かに日本では青と緑とが色感の上からではなくて、言葉の上で混同されている面があり、一見日本人の色感が敏感でないにとられ勝である。しかしこれはアオガネ、アカガネ、シロガネ、クロガネと対になっている歴史的の組合せであって、ミドリガネでは意味をなさないわけである。文化の歴史が異るとんでもない誤解があるものである。オーストラリアの人がツバキについて、日本人は red と rose の区別がつかないのではないかと書いているのを見て失笑したことがある。自国の文化や言葉のみしか知らない非知識人の浅見である。

(お茶の水女子大学生物学教室)